

国立教育政策研究所FD公開セミナー
『FD実質化のための提案～「FDマップ」、「基準枠組」の活用による教育改善～』

開催日時： 2009年6月20日（土）13:00-17:00

開催場所： 国立教育政策研究所

報告者： 経済学部 教授 高木 功

1. セミナー・プログラム

13:00 開会挨拶

13:10-14:30 特別講演: Dr. Mathew L. Ouellett (POD元会長)

「FD推進にあたってのFDer (ファルティ・ディベロッパ-)の役割」 (仮) (逐次通訳付)

Dr. Mathew L. Ouellett

Director, Center for Teaching, University of Massachusetts-Amherst,
Former President of Professional and Organizational Development (POD) Network
in Higher Education, Former President of the New England Faculty Development
Consortium

<休憩>

14:45 プロジェクト研究の成果報告

FDマップWG 佐藤浩章 (愛媛大学)、稲永由紀 (筑波大学) 中島英博 (名城大学)、長澤多代 (三重大学)

FDプログラム開発支援WG 加藤かおり (新潟大学)、岡田佳子 (長崎大学) 杉原真晃 (山形大学)

15:30 パネル・ディスカッション「開発研究とFD実質化支援」佐藤浩章 (愛媛大学)、加藤かおり (新潟大学)、羽田貴史 (東北大学)、玉真之介 (岩手大学)

コメンテーター: 松本美奈 (読売新聞社)

コーディネーター: 川島啓二 (国立教育政策研究所)

16:50 コメント Dr. Mathew L. Ouellett 通訳: 吉良直 (日本教育大学院大学)

17:00 終了

2. 会議の内容と趣旨、配布物

大学教育の改善を進めるために、FDへの取り組みは不可欠である。国立教育政策研究所では、プロジェクト研究「FDプログラムの構築支援とFDer (ファルティ・ディベロッパ-)の能力開発に関する研究 (平成20~22年度)」において、FDプログラム構築のための基盤となるようなツールの作成や、FD担当者のあり方について、開発的な研究を進めてきた。本セミナーは、その成果報告であり、各大学のFD担当者(ファルティ・ディベロッパ-)に、FDの具体的なツールを提示し、各大学の独自の応用を促すことが目的と理解される。

主な配布物として：

- 国立教育政策研究所 F D e r 研究会編『大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン』2009年3月(重要)
- 国立教育政策研究所編『学士課程教育の構成と体系化』（第27回教育研究公開シンポ報告書）2009年3月
- 会議報告PPファイルコピー
 - Dr. Mathew L. Ouellett, Faculty Development in the United States: Roles of Faculty Developers (論文とPPファイル)
 - FDマップWG「FDマップ開発プロジェクト研究の成果報告」
 - 新任FDプログラムWG「新任教員FDのための基準枠組開発プロジェクト」
 - 加藤かほり(新潟大学)「新任FDプログラム開発支援の意義ー基本的教育力の質の向上の実質化をめざして」
 - 羽田貴史(東北大高等教育開発推進センター) 「FDマップへのコメントと開発研究の課題」
- 4. 四国地区大学教育職員能力開発ネットワーク (SPOD) 編『研修プログラムガイド2009』2009年5月

3. 評価と感想

(1) 標準的なFDマップ(包括的なFDの具体的な構成項目と4段階の進捗チェック)が提示された。非常に具体的で、本学のFDにとっても、活用を検討すべき。学部が主力となるが有用であろう。

(2) その際、大事なのは、この標準的なFDマップを本学の教育ビジョンとFDあるいはED(Educational Development)の現状と課題を踏まえて、構築すること。

(3) FDマップ、新任FD基準枠組は、大学人として自ら教育、研究能力の向上の必要性を自覚したものを助ける一つのツールである。これをたたき台として、対話と討議を通してFDを実現することを可能としてくれるものと評価される。

(4) 羽田氏の「大学教員の教育能力や人間性の本質は、対学生関係で現れる」との言、またFDマップはスキルに偏重しているとし、「個々のスキルよりも、それを生み出す能力に着目すべきである。スキルは状況が変われば機能しない。重要なのは『技術的熟達者』(technical expert)ではなく『反省的実践家』(reflective practitioner)である」との言葉は深い。

以上